

## 【8つのビジョンと基盤整備】

### ⑦ 文化の力で世界に貢献する京都の実現

#### 【主なポイント】

- ▶ 文化庁の京都移転や2025年日本国際博覧会（略称「大阪・関西万博」）の開催のインパクトを生かして、京都からの文化創造・発信を行うと共に、多彩な交流を図り、「内外から高い評価を受ける文化を生み続ける京都」の力を更に高めます。
- ▶ 文化の維持・保存・継承・定着を進めることで、文化の力で活力とうるおいがあり、豊かさを感じられる社会の実現をめざします。

#### 【重点分野】

##### ■ 文化庁京都移転をエンジンとするオール京都での「文化首都・京都」の推進

（主要な方策）

- ・ 文化庁京都移転を契機として、伝統芸能や舞台芸術、美術工芸等の様々な文化芸術を京都中で体験できる取組を集中的に開催
- ・ 文化の活用による地域活性化をめざし、国とともに全国の自治体や関係団体による取組の発表や表彰を行う「全国地域文化活用サミット（仮称）」を開催
- ・ 文化庁移転を契機とした、プロやアマの音楽家をはじめ、音楽家を夢見る人々が世界中から集まり、交流し、新しい音楽を創造・発信する「音楽の未来首都」の形成
- ・ 府内各地でのアーティスト作品の展示やパフォーマンスステージ、府民参加型の音楽祭等の幅広い展開による文化芸術の裾野の拡大
- ・ 企業版ふるさと納税制度なども活用した、子どもがアートに触れられる機会を創出する「子どもアートプロジェクト」の展開

##### ■ 京都の伝統文化・生活文化・文化財の次代への継承と活用

（主要な方策）

- ・ 小学生等による地域の伝統芸能を発表する機会を創出し、伝統芸能を支える次世代の担い手を育成
- ・ 京都府立大学の学科再編で誕生した和食文化学科等における和食文化人材の育成
- ・ 京料理や茶道、華道、その他の生活文化に親しむ機会の創出による、京都に根付く暮らしの文化の継承と国内外への発信
- ・ 京都が培ってきた文化財修理技術を継承・発展させ、文化財を次世代へ継承するため、国が設置する「文化財修理センター（仮称）」と連携した世界に誇る文化財修復拠点を形成
- ・ 産学官連携による最新研究成果の国内外への発信につなげるため、文化財保護に関する総合的な調査研究施設の関西拠点を関西文化学術研究都市に誘致
- ・ 恭仁宮跡の特別史跡化など府内の史跡の魅力掘り起こしと活用整備の促進

## ■ 多彩な文化の交流の場の創出による新たな文化の創造

(主要な方策)

- ・ 劇場等と連携した文化団体等の表現の場の創出による、文化活動への支援と府民が持続的に文化体験できる場の提供
- ・ コンテンツ産業の集積を生かしたクリエイターと伝統産業や医療関係等との交流や、VR・ARやメタバースなどの先端テクノロジーとの融合の促進によるコンテンツイノベーションの創出
- ・ 府立文化芸術会館等、老朽化が進む既存文化施設の機能承継も踏まえ、舞台芸術・視覚芸術拠点施設（シアターコンプレックス）など、旧総合資料館跡地、植物園などの整備推進
- ・ 伝統文化や祭り、和菓子など京都の文化を子どもたちにも分かりやすく疑似体験できるデジタル・ミュージアムの構築
- ・ 元京都府議会議員公舎（旧富岡鉄斎邸）の保存活用など、京都の様々な資源の磨き上げと京都文化の発信への活用
- ・ 丹後地域の歴史、文化、観光の拠点施設となる博物館をめざす府立丹後郷土資料館のリニューアル

### 【到達目標】

- ・ 「文化・芸術に関わりを持つ（鑑賞・体験含む）人の割合」を90.0%に上昇させる  
(文化施策に関する府民意識調査（京都府）：62.0%（2021年度）)
- ・ 「歴史的な文化遺産や文化財などが社会全体で守られ、活用されていると思う人の割合」を90.0%に上昇させる  
(京都府民の意識調査（京都府）：82.9%（2021年度）)
- ・ 「府内のアートフェア等に参加する若手アーティスト（40歳以下）の数」を基準値129人（2021年度）の1.5倍の200人に増加させる  
(京都府による実態把握：129人（2021年度）)
- ・ 「府内のアートフェア等における販売額」を基準値（3億1,485万円（2021年度））の1.5倍の4億7,200万円に増加させる  
(京都府による実態把握：3億1,485万円（2021年度）)